

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

全国規模での高校山岳部の実態調査 2(承前)

3、指導者の育成

上に述べたように、高校山岳部においては指導者の意向や登山経験が大きく反映する。それでは、指導者はどのような点を目標にしているのだろうか。3年間の山岳部の目標(ア指8)については、「楽しさを教える」「自分で計画を立てられる」「安全登山のための(基本)技術」などを回答した指導者が多かった。そのために、読図や幕営技術、天気図を書き予報するなど具体的な項目をあげている回答も目立った。登山形態としては、「無雪期の北アルプスの縦走登山(3泊程度)を目標にしている」という回答が3割近くあり、このあたりが一つの目安とも考えられる。これは大方妥当なところだろう。

「(時代なのか無理はせず)高望みせず、山を知ってもらうこと」「大人になってから趣味として安全に登山できること」などという回答がある一方で、「オールシーズン山で生活できるようにする」「冬山雪洞泊まで教えた」「積雪期の高所での幕営」「(理想としては)大学山岳部の活動」といった回答もあった。「積雪期の登山」(いうまでもなく地域差はあるが)をどう取り入れるかで、登山の質は大きく変わって来る。やはり、ここには顧問個人の経験、さらには哲学や思想などが大きく反映している。私自身は、長野県に住んでいる者として、積雪期の登山をしないということになると、年間の半分は活動休止状態になってしまうこともあるので、入学直後残雪期の体験からはじめ安全には十分に配慮して積極的に雪山でも活動を行っている。雪上にも様々なレベルがあり、技術も多様なことから、指導者の力量を高めることで生徒の活動の幅も広がることを実感している。

高校大学を通じて、自らが山岳部員として活動した経験のある指導者は、高校山岳部経験者が27名(16%)、ワンダーフォーゲル等も含む大学での山岳部経験者が22名(13%)であり、多くの指導者は教員となってから登山を始めたことがわかる(ア指11、13)。また、登山能力を培った場所として社会人山岳会への所属を挙げているのは35名(21%)であった(ア指13)。これらから考えられるのは、高校顧問の技術研鑽は、社会人山岳会や大学山岳会ではなく、アンケートに現れている通り、個人的または少人数の仲間研鑽(84%)、各種の登山講習会・研修会(73%)が大きな割合を占めているということである。私自身が教師になった1980年代くらいまでは、若い教師も多く、他の部活動に比べて特に負担の大きい山岳部の顧問は若い者にさせておけという風潮もあった。そして、そういった若い教師たちは、先輩顧問に鍛えてもらいながら育ってきた。これが、回答に現れている「個人的または少人数の仲間」ということの意味するところであろう。こうした伝統を途絶えさせてはならない。高校山岳部顧問には、登山技術指導はもちろん、それにとどまらない教師としての引率責任、課外活動としての教育的側面も問われる。その意味でも、顧問経験の長い同僚や先輩教師から、また高体連の加盟校の他校の先生から教わるものは大きいはずだ。

山岳部を指導する上での悩み(ア指16)として、「顧問としての力量が伴っていない

ので不安」「若い顧問が育っていない」「顧問の高齢化や体力の低下」「顧問のなり手が
ない」「安全面での校内での理解が得られない」「旅費・装備費等経済面での負担が大きい」
などといった声が寄せられている。これらに対しては、「指導者増加に向けた普及と
指導力アップのための研修機会」「他校との交流」「学校、県教委や文科省の理解」「経済
面でのバックアップ」などを期待する声も大きかった（ア指 17）。各都道府県高体連で
研修の機会を設定しているところがあるとも聞いているが、これらをさらに充実させる
とともに、参加できる体制の整備、研修内容を交流、共有できるようなブロックや全国
レベルでの連携も必要かもしれない。ブロック単位では東北地区と九州地区の高体連で
は毎年各県持ち回りで顧問研修会を実施している。また、北信越地区では6年前から山
岳部顧問の有志が集まって山スキーの技術研修と交流を図っている。中国地区を中心
にした西日本でも2年前から同様の取り組みが生まれている。こういった自主的な動きに
も注目したいが、国立登山研修所ではかつてあったような高校の顧問のみを対象にした
研修講座が現在はない。年に2回行われる安全登山普及指導者中央研修会が形式を変え
て、それを引き継いでいるものの、必ずしも高校顧問の参加は多くない。一方で「学
校現場が忙しい」という実情もある中で、高校の山岳部の顧問の力量アップのために、
高体連や国立登山研修所などで高校山岳部指導者対象の講習会や研修会の新設やより一
層の充実が望まれる。

それと同時に、将来の登山文化を担う若者の育成や安全登山の普及・啓発という観点
で、文科省・都道府県教育委員会など行政からの有形無形のバックアップも望まれると
ころだ。

4、生徒アンケートから

それでは、生徒は何を求めて山岳部へと足を踏み入れるのだろうか。指導者の思いと
生徒の思いのすり合わせも重要である。生徒の中学校時代の部活動は、山岳部も含む運
動部への所属が593名（81%）、文化部への所属113名（16%）、無所属25名（3%）で
あった（アンケート生徒用、問3：以下、ア生3と記載）。回答では、運動部へ所属して
いた者のうち39名（5%）が山岳部へ所属していた（内9名は中高一貫校と推測される）
と回答している。中学校で山岳部の活動をしているところは少数であるため、稀有な例
である。しかし、逆に言えば、中学での山岳体験は高校でも引き継がれるということの
証明でもある。大部分の生徒にとって、高校での山岳部活動は、新しいことへの挑戦で
もある。

記述部分から生徒の声を拾ってみると、入部動機（ア生 13）については、「山や自然
が好き」「山や自然に興味があった」といった理由を答えている生徒が30%を超え、さ
らに「楽しそうだから」「友人や先輩に誘われて」などというものを挙げている生徒もそ
れぞれ15%程度で、この4項目で概ね6割を占めている。高校のクラブ活動は青春時代
の貴重な思い出づくりでもあり、そこに高校山岳部のもつ一つの側面もある。山や自然
が好きであるという要素に加え、仲間との関わりや高校生活の充実をクラブ活動に求め
る高校生の姿が現れていると言えよう。また、「先生の影響」、「親や兄・姉の影響」や「こ
れまでの山登りの体験」といった回答を寄せている生徒も10%程度おり、周囲の環境や
幼いころからの登山の経験も入部動機の要素としては一定の比率を占めている。「自分
にもできそうだから」とか「新しいチャレンジとして」、「体力をつけたいから」など
という回答も高校生らしい。